

中晩柑‘はるき’および晩生ウンシュウミカン‘植美’の育成について

和歌山県果樹試験場 主査研究員 田嶋 皓

1. はじめに

近年、異常気象等の影響により、高品質なカンキツ果実を安定して生産することが難しくなっています。果樹試験場では、栽培性に優れ食味の良い県オリジナル品種の開発を目指し、交雑育種および枝変わり探索によりカンキツの新品種育成に取り組みました。

2. 方法

1) ‘はるき’の育成過程

2002年に‘清見’に‘中野3号ポンカン’を交配し、得られた交雑個体を果樹試験場内の圃場へ接ぎ木し、結実促進処理を行いました。2008年から果実品質調査を開始し、73個体の中から果実品質や栽培性、関係者による試食評価をもとに最終選抜しました。その後品種登録出願を行い、2019年3月に出願公表となりました。

2) ‘植美’の育成過程

2006年に有田川町出の植田氏の園地で発見された‘尾張系’の一樹変異個体であり、同年から果実調査を開始しました。対照品種である‘林温州’や‘尾張系’（以下、対照品種）と比較して浮皮が安定して少なく、同時期に調査した晩生系統の中でもっとも栽培性に優れる個体であったことから最終選抜を行いました。その後、品種登録の出願支援を行い、2017年8月に出願公表、2019年11月に品種登録となりました。

3. 結果

1) ‘はるき’の特徴

果実の成熟期は3月、果実重は180g程度で外観は良好です（図1）。良食味であり、さじょうが大きくさくさくした食感が特徴です。成熟期の糖度は13～14度（図2）、クエン酸含有率は‘清見’と同程度に推移します（図3）。樹勢はやや強く早期に樹冠拡大します。枝の分岐角度は狭く、苗木はポンカンに似ています（図4）。新梢にトゲの発生がみられますが、結実とともに短くなります。また、かいよう病や果皮障害の発生は比較的少ない傾向です。

2) ‘植美’の特徴

果実の外観は対照品種とほぼ同じですが、腐敗や貯蔵性低下の原因となる浮皮の発生程度が小さいのが特徴です（図5）。複数の高接ぎ園地でも同様の傾向がみられましたが、過熟になると対照品種と同様に浮皮が発生します（図6）。12月中旬における糖度は対照品種とほぼ同等、クエン酸含有率は0.8%程度で食味は良好です。対照品種と比較して葉は小さく節間が短い傾向を示すことから、樹勢はやや弱いです。また、枝が下垂しやすいため樹はコンパクトで大木にならず、収穫やせん定などの管理作業が容易に行えるという特徴があります（図7）。

4. まとめ

両品種とも栽培は比較的容易であると考えられますが、詳細な特性は今後栽培試験により明らかにしていきたいと考えています。なお、苗木の流通は‘はるき’が2021年春以降、‘植美’が2020年春以降に始まる予定です。



図1 'はるき'の果実

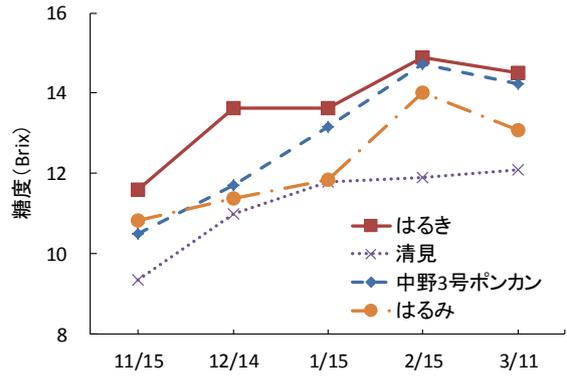


図2 'はるき'と対照品種の糖度の推移 (2018~2019年)

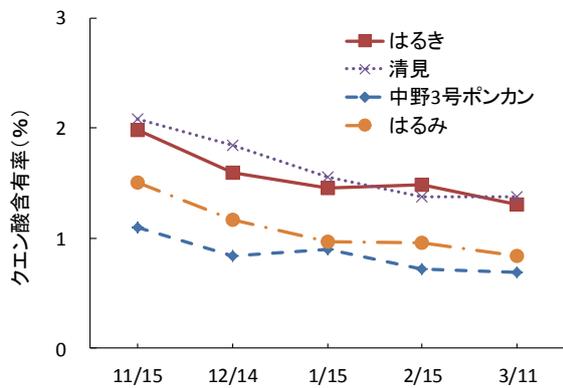


図3 'はるき'と対照品種のクエン酸含有率の推移 (2018~2019年)



図4 'はるき'の苗木 (3年生)

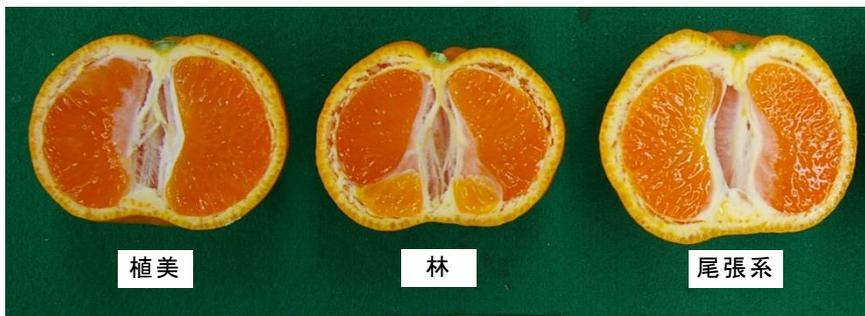


図5 '植美'と対照品種の果実断面

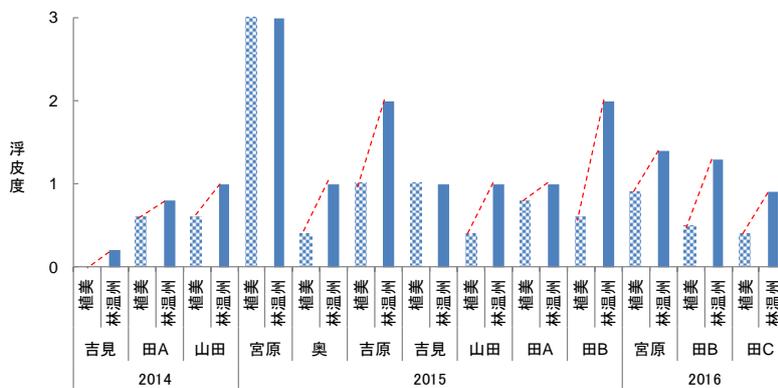


図6 '植美'と'林温州'の浮皮度の比較 (2014~2016年12月中旬)



図7 '植美'の下垂した枝